

分科会総括研究報告

東北大学医学部産科学婦人科学教室

鈴木雅州

○ 研究目的および方法

この研究の目的は、胎児障害すなわち胎児死亡・胎児先天異常・胎児疾患・子宮内発育遅延・流早産などが、社会の最近の変化に伴った生活環境・社会構造・医療によって如何なる影響をうけるかを調査する目的で行なわれた。この成果は、将来の母子衛生行政に重大な示唆を与えるものと思われる。この研究の方法は、疫学調査に重点をおき、また必要な臨床検査を行ない、データは統計学的処理を行なった。

○ 研究成績の要約

1. 10代婦人の妊娠に関する研究

A 10代妊娠の実態調査

昨年にひき続き、集計された10代妊娠840例について、種々の観点より分析を行なった。

B 10代妊娠の産科的異常

婚姻状態とローテーションに重点をおき、分娩例の合併症の頻度、分娩所要時間、出血量、児体重などを調査した。18才以下の分娩例、約70例について分析した。

C 10代の母親から生まれた児の養育状態

未婚の場合、妊娠・分娩後結婚するものも多いが、多くは自分達で子供を育てていた。そのほか、養子に出されたもの、施設への収容、母親と一緒に、自分で自活し一人で養育などであるが、そのため学校を退学させられる例も多く、母子共、不遇な境遇にあるものが多い。

2. 肥 満

7,070例の妊産婦について、厚生省国民栄養調査による身長別体重表から肥満度を検討した結果、肥満度が高い妊婦では、妊娠中毒症と糖尿病と過期産の発生率、および帝王切開率が高く、またLGAの頻度も高かった。一方、るいそう妊婦では、切迫流産の頻度とSGAの発生率が高い傾向にあった。分娩時出血量は、肥満産婦・るいそう産婦ともに増加する傾向にあった。

3. 核 家 族

6,755例での検討では、夫との同居が98%、子供との同居が51%であった。子供の数が増えるにしたがい、切迫早産の頻度の増加を認めた。さらに、核家族化の影響は、分娩よりも妊娠に影響を及ぼす可能性のある事が示唆された。全症例中、夫の親との同居は19.0%で最も多く、うち両親と同居は3.4%であった。核家族化は、職業・住居・旅行・嗜好などの社会的要因との関連が強く、これらの因子を分析する必要がある。

4. 勤 労 婦 人

7,655例中、勤労婦人は2,214例であった。勤労婦人において月経不順、骨盤位分娩、前早期破水がやや多い傾向を認めた。さらに、新生児については差をみなかったが、勤労婦人妊娠では死産が有意に多かった。

5. 旅 行

7,581例中、妊娠中旅行した婦人は、2,616例で、里帰り分娩は、377例(8.7%)であった。回数では1回が最も多く、利用機関は自動車、列車、航空機、船の順であった。4回以上の旅行ならびに船での旅行に、早産例が多かった。しかし、旅行をした妊婦では、流早産・異常分娩が少なく、新生児については、両群間に有意差がなかった。

6. コ ー ヒ ー

9,718例中のコーヒー飲用者6,097例について検討した結果、1日5杯以上の飲用群にSGAの有意の増加をみた。抹茶の症例数は少なかったので、結論は、次年度へ持越す。

7. 冷房

7,420例で検討し、平均冷房時間は、1日3～4時間が最も多かった。一般に産科異常は、冷房時間、冷房期間が長い程、非冷房群に比して、減少している傾向を認めた。冷房には、それ以外の因子が同時に加わる可能性があるので、さらに検討を加えることとした。

8. 交通機関利用

交通機関を利用した妊婦は、4,214例中、1,983例であった。そのうち、自動車使用が40%あった。交通機関利用妊婦に前期破水が多かった。骨盤位分娩・帝王切開術は、交通機関利用群の頻度が高かった。

9. 居住条件

6,491例の妊婦中、ビル居住は2,083例あった。早産はビル居住でエレベーター使用群に多かった。自然流産・妊娠中毒症・貧血はビル居住でエレベーターのない群に多かった。

10. 輸血

A 輸血の影響

80,267例について、抗赤血球不規則同種抗体のスクリーニングおよび、同定を施行した。妊婦20,216例中283例(1.40%)で、輸血される患者より不規則同種抗体保有率が高かった。抗体保有産婦では、抗-Dが最もその頻度が高く、重篤であって、抗-Eがこれに次ぐ。抗-Lewis抗体はその数は多いが、新生児溶血性疾患をおこすことはない。

B 交換輸血・輸血を受けた児の長期予後

新生児病室で交換輸血、輸血を受けた児の頻度は、192例中28例(14.6%)であった。特に出生体重1,000g未満では15例中8例(53.3%)、1,000～1,499gでは23例中12例(52.2%)であり、10年前に比して増加が見られた。HB抗体陽性児が高頻度にみられるが、輸血によるものか、垂直感染によるものか、判定できなかった。

11. 妊娠期の栄養の実態と保健指導

正常妊婦85例、貧血妊婦29例、中毒症妊婦14例について、栄養実態調査を行なった。Ca、Feは不足しており、貧血妊婦では正常妊婦に比べ、糖質エネルギー比が有意に高率を示した。妊娠末期の初産婦では、貧血群は正常群に比べ、欠食が多く、お茶づけですませたり、お菓子などを多く取るものが明らかに多く、また中毒症群では欠食傾向や、一回の主食の量が明らかに少なかった。

12. 乳児に見られるビタミンK欠乏性出血性素因に関する研究

幼若乳児の潜在性ビタミンK欠乏性を把握するために、ヘパプラスチンテスト(Hpt)によるスクリーニングの共同研究を行なった。対象は、ビタミンK(Vk)非投与群2,493例、投与群1,021例について検討した。Vk非投与群のHpt値は、母乳栄養児1,517例では20%未満5例(0.3%)であった。Vk投与群では、母乳栄養児61.9±11.3%、混合栄養児65.8±13.1%、人工栄養児65.8±13.1%であり、20%未満のものは見られなかった。Hpt値30%未満のものはdefiniteな危険域にあり、容易にconditional deficiencyをきたし、出血症状を見るに至る可能性がある。Hpt値30～50%はborder lineであり、若干の注意が必要となる。

13. 在胎週数ならびに出生体重からみた早期新生児死亡率ならびにその対策に関する研究

胎児発育曲線は従来ルブチenkoや船川の曲線が用いられていたが、10数年以前のものであり、今回、最新の19,509例の多数例について胎児発育曲線を作成した。(早産率3.32%、正期産率92.72%、過期産率3.96%であった。)この曲線は、過去の何の曲線よりも実用的であり、我國の母子衛生における重要な基本的資料となるであろう。

14. 21世紀において予測される家庭像と、それに影響を与えると考えられる諸要因についての研究

今後の20年は、老化社会への移行時代で、21世紀初頭の子供達は、石油危機の後の様々な社会のヒズミを肩に荷ないながら老人福祉を負擔しなければならぬ。医学・医療についても、今日までは、技術革新の

成果をオフ・チミスティックに受入れて、自ら進歩してきたが、これからは、医学と人間との関わりを重視した内容のものになって行くに違いない。21世紀を考えることは、今のわれわれの責任である。

15. 思春期医学ならびに保健のカバーすべき領域の設定に関する研究

思春期医学ならびに保健管理は、その個人の現在ならびに未来の健康のほかに、よい子孫の育成をめざした継続的・統合的なものでなければならない。思春期をとりまく問題を分類し、各研究協力者の専門分野より欠けた問題点、その解決に必要な基礎的研究、調査など、フィールド・スタディ、指導・教育法ならびに協力できる分野をアンケート調査した。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



研究目的および方法

この研究の目的は、胎児障害すなわち胎児死亡・胎児先天異常・胎児疾患・子宮内発育遅延・流産などが、社会の最近の変化に伴った生活環境・社会構造・医療によって如何なる影響を受けるかを調査する目的で行なわれた。この成果は、将来の母子衛生行政に重大な示唆を与えるものと思われる。この研究の方法は、疫学調査に重点をおき、また必要な臨床検査を行ない、データは統計学的処理を行なった。